大本教

■ 大本教天恩郷月宮殿 345.78km － 皇居宮中三殿 － 千歳車塚古墳 345.78km

■ 土御門神道本庁天壇 42.67km － 大本教天恩郷月宮殿 － 大本教梅松苑本宮山月山不二 42.67km
■ － 大神宮社 42.67km
■ － 東小田原随願寺跡 42.67km
■ － 薬師寺 金堂 42.67km

大本教天恩郷月宮殿（亀岡市）

天恩郷は戦国時代の名将明智光秀公の居城・旧亀山城址である。明治の廃藩置県後、幼少の出口王仁三郎は、よくこの城址で遊び、荒れ果てていく城跡を嘆き、いつか自らの手で再興したいという希望を胸に抱いていた。大正８年（1919）、王仁三郎は荒れ果て顧みる者もなかった城跡を買いとり、信徒と共に整備をすすめ、石垣を再築し、大本の聖場を建設した。

昭和 10 年（1935）第二次大本事件により官憲の手で、神殿・施設がことごとく破壊されたが、昭和 20 年（1945）、事件が無罪解決。再び再建に着手され、以後数多くの神殿・施設が建設され現在にいたっている。

大本事件以前には、神殿「月宮殿」が建っていた。事件後、数千個の国魂石を積み上げて宝座が造られ、頂上には天拝石が安置された。天恩郷の最も尊い場所とされる。禁足地。

京都府亀岡市古世町北古世８１

千歳車塚古墳

6 世紀前半（古墳時代後期前半）の築造と推定され、古墳時代後期としては丹波地方で最大規模の古墳である。被葬者は明らかでない。当時としては丹波地方で最大規模であることから、亀岡盆地のみならず南丹波全域を支配した首長墓と推定される。西丹波（篠山盆地）まで支配した広域首長墓とする説もある。一説では、被葬者は『日本書紀』継体天皇即位前紀に見える王族の倭彦王（やまとひこのおおきみ/やまとひこのおう）に比定される。京都府亀岡市千歳町千歳車塚

大本教梅松苑 本宮山 月山不二（綾部市）

大本の聖地「梅松苑（大本本部 綾部祭祀センター」は大本発祥の地。田園都市綾部市の中心を流れる清流由良川（和知川）のほとり、緑深い本宮山一帯を境内地とし、長生殿をはじめ数々の神殿が建ち並んでいる。大本の発祥は、明治 25 年旧正月、京都府綾部市本宮の地において、国常立尊の神霊が艮の金神（うしとらのこんじん）の名により、出口なお開祖に神がかりし、三千世界の立替え立直し、みろく神世の実現を啓示したことによる。また大本は、綾部市梅松苑（大本本部 綾部祭祀センター）及び亀岡市天恩郷（大本本部 亀岡宣教センター）を神業の根本聖地とし、梅松苑（大本本部 綾部祭祀センター）を祭祀の中心地、天恩郷（大本本部 亀岡宣教センター）を宣教の中心地としている。

大本の至聖所「本宮山」。標高 91.7 メートル、広さ約６ヘクタール。神体山である。鶴山、桶伏山、円山、丸山とも呼ばれる。現在、山頂には、残った旧長生殿の礎石の上に、こんもりと砂盛りされた最高至聖所「月山不二（つきやまふじ）」がある。その正面には神声碑、教碑がたっている。本宮山は禁足の至聖所になっている。京都府綾部市本宮町１－１

天社土御門神道本庁天壇

天文学・暦学を受け継いだ安倍氏の嫡流が、後に天皇より「土御門」と言う称号を賜い、以後は土御門家を称する堂上家として仕えた。室町中期から戦国期にかけては、都の戦乱を避け、数代にわたり、所領のある若狭国に移住していた。戦乱の終息後、都に戻ったが、秀次事件に連座し、豊臣秀吉の怒りを買い、またしても、都を追われる事になってしまい、宮廷陰陽道は一時終息する。 しかし、関ヶ原の戦いが終わり豊臣家が衰退すると、土御門久脩（つちみかど ひさなが）は、徳川氏に「陰陽道宗家」として認められ、慶長 5 年（1600 年）には宮廷出仕を再開する事になった。また慶長 8 年には、家康の征夷大将軍任命式を行っている。

土御門久脩の後、泰重・泰広と続き、その後の泰福が陰陽頭になった時（天和 3 年 5 月（1683 年））諸国の陰陽道の支配を土御門家に仰せ付ける旨の「霊元天皇綸旨」が下された。同時に、徳川綱吉の朱印状によっても認められ、土御門は全国の陰陽師の統括と、造暦の権利を掌握することになった。山崎闇斎の影響を受けた泰福は陰陽道に垂加神道を取り入れて独自の神道理論を打ち立てた。一般的にはこれが「土御門神道」の開始と言われている。

土御門家の陰陽道組織化は、幕末には全国に広まったが、明治維新後の明治 3 年（1870 年）に陰陽寮が廃止され、太政官から土御門に対して、天文学・暦学の事は、以後大学寮の管轄になると言い渡しを受ける。 それによって陰陽師の身分もなくなる事になり、陰陽師たちは庇護を失い転職するか、独自の宗教活動をするようになった。 そうして民間の習俗・信仰と習合しつつ陰陽道は生活に溶け込んでいったのである。

安家神道（土御門神道）は、そうした状況の中で古神道などの影響を受けながら、かつての関係者の手によって守られた、現代の陰陽道である。 現在は、かつての土御門家の領地であった福井県おおい町（旧名田庄村地区）に日本一社陰陽道宗家「土御門神道本庁」が置かれている。

福井県大飯郡おおい町名田庄納田終１２９－９

大神宮社

明治４年、京都府知事が勧請。御祭神：天照大御神、大物主神、大山祇神。
明治に入ってから開墾された地域。　京都府相楽郡南山城村童仙房道宣

東小田原随願寺跡

「大乗院自社雑事記」では、「明応二年から二百余年以前に大きな火災にみまわれた。さらに随願寺には三重塔もあったがそれもすでに倒壊した」と伝えており、浄瑠璃寺に匹敵する大寺院であったことが彷彿とさせます。随願寺で造立されたとされる「愛染明王坐像」は奈良国立博物館に所蔵されています。

平安中期の長和２年(1013)に創建されたということ以外に、ほとんど記録が残っていない。随願寺という寺号は、建保２年(1214)の行偏譲状（ぎょうへんゆずりじょう）に、「東小田随願寺」と見えているのが初出とされている。

浄瑠璃寺に匹敵する規模を誇った堂宇は、鎌倉後期に焼失してしまった。火災にあってから１００年あまり後には、山伏たちが随願寺から岩船（いわふね）へ移ってしまったと伝えられている。随願寺は東小からミロクの辻へ抜ける道筋にあって、カラスの壺にさしかかる手前の谷間に位置している。谷の北斜面に築かれた石段を登っていくと、中腹にややテラス状に張り出した平坦部があり、そこにいくつかの礎石が点在している。現在はその一部に白山・春日両社が鎮座していて、もとは随願寺の鎮守だったことをうかがわせる。

http://www.bell.jp/pancho/kasihara_diary/2006_07_13.htm
京都府木津川市加茂町東小下井手口

薬師寺 金堂

薬師寺は「法相宗［ほっそうしゅう］」の大本山。天武天皇により発願（680)、持統天皇によって本尊開眼(697)、更に文武天皇の御代に至り、飛鳥の地において堂宇の完成を見ました。その後、平城遷都(710)に伴い現在地に移されたものです。
奈良県奈良市西ノ京町４５７

備考

土御門家や薬師寺に守られた亀山城（明智光秀）のしくみを、出口王仁三郎がうまく利用しているのがわかる。さらに、丹波の支配者だったとされる千歳車塚古墳と同距離で皇居宮中三殿とも繋がる。大神宮神社が明治４年に作られている。亀山城の聖地化は大本以前に予定されていたのかもしれない。

大本教と田布施

■石城神社 344.75km － 大本教天恩郷月宮殿 － 浮島神社 344.75km

石城神社

国史では、貞観 9 年（867 年）に「石城神」の神階が正五位上から従四位下に昇叙された旨が記載されている。また、延長 5 年（927 年）成立の『延喜式』神名帳では周防国熊毛郡に「石城神社」と記載され、式内社に列している。

嘉禄 3 年（1227 年）3 月の「周防石城宮神官解」では、神社に係る紛争のことが見える。

文明元年（1469 年）7 月には大内政弘により現在の本殿が造営された。この本殿は、永正 11 年（1514 年）に大内義興により、明暦 2 年（1656 年）に毛利綱広により、寛政 10 年（1798 年）に毛利斉房によりそれぞれ修復が行われた[1]。また、安政 4 年（1857 年）には毛利敬親により拝殿と神護寺仁王門（現在の石城神社随身門）が造営されている。

近世には「石城山式内三社大権現」と称され、石城山を山岳霊場とする信仰が形成されていた[3]。明治維新後、明治 6 年（1873 年）に近代社格制度において郷社に列し、大正 2 年（1913 年）に県社に昇格した。また、かつて神社の西側には別当寺の石城山舎那院神護寺があったが、明治 3 年（1870 年）に廃寺となっている。

境外社の宇和奈利社が本来の石城山の神であったと見て、山城築造に伴い朝廷から大山祇神・雷神・高靇神が勧請され、宇和奈利社に代わる山城の守護神として石城神社が創建されたとする説もある。

山口県光市塩田

大本教天恩郷月宮殿（亀岡市）※上記参照

浮島神社

ひねきり明神と呼ばれていた。鳥越にも浮島神社分神があり、お祭りの神輿が休憩する。

http://blog.goo.ne.jp/simyo124/e/499096abf7cb3d3871e0f7096d0b11be

山口県熊毛郡田布施町麻郷

備考　大本教の気を石城山に引く。田布施と大本教はやはり繋がっていた。

皇居
大本教
田布施
名古屋
横浜
静岡
浜松
大阪
神戸
岡山
福井県
岐阜県
埼玉県
神奈川県
千葉県
愛知県
静岡県
三重県
奈良県
和歌山県
徳島県
香川県
広島県
鳥取県
島根県
山口県
松江
松山